Inclusive Journal of Education

Printed 2017.0830
Online ISSN: 2189-9185
Published by Asian Society of Human Services

"A house in the Zamami"
Megumi MIYACHIKA

August 2017
VOL. 3

Asian Society of Human Services

ACTIVITY REPORT

重症心身障害児者のきょうだいが抱く思いの変容と周囲の人々との関係性について
－青年期のきょうだいに対する聞き取り調査から－

The Transformation of Thoughts and Feelings of the Siblings of Severely Handicapped Children and the Surrounding People; Interviews with Siblings during Adolescence

越智 彩帆 [1] (Ayaho OCHI), 越智 文香 [1] (Ayaka OCHI)
山下 祥代 [1] (Sachiyo YAMASHITA), 樫木 暢子 [2] (Nagako KASHIKI),
西 朋子 [3] (Tomoko NISHI)

1) 愛媛大学大学院教育学研究科特別支援教育専攻
(Graduate School of Education, Special Need Education Department, EHIME UNIVERSITY)
2) 愛媛大学大学院教育学研究科
(Graduate School of Education, EHIME UNIVERSITY)
3) 特定非営利活動法人ラ・ファミリエ
(Lafamille of Specified Nonprofit Corporation)

＜Key-words＞
きょうだい，思い、重症心身障害児者
(siblings, thought, feeling, severe mental handicap)

ah.yah.hoo@gmail.com（越智 彩帆）

Journal of Inclusive Education, 2017, 3:77-86. © 2017 Asian Society of Human Services

Received
2017 / 7 / 28

Revised
2017 / 8 / 14

Accepted
2017 / 8 / 15

Published
2017 / 8 / 30

ABSTRACT

本研究では、重症心身障害児者のきょうだいの幼少期から現在までの体験や思いの変容と、それにおける周囲の人からの影響を明らかにすることを目的とし、重症心身障害児者を同胞にもつ青年期の男女４名を対象とし、聞き取り調査を行った。

得られた語りから概念を抽出し、収束させながらカテゴライズを行った結果、きょうだいと同胞に関する過去の体験と思い、現在のきょうだいの思い、きょうだいの思いと親と祖父母との関係、きょうだいの思いと学校・同年代の友人・他人との関係に関するカテゴリーが得られた。

きょうだいに対する周囲の人からの働きかけとして、親との良好な関係や家族団らん、話し相手の存在や周囲の人の気遣い、同胞を特別扱いしない周囲の人の関わり方が、きょうだいの同胞の障害受容に有効であったと考えられる。

Ⅰ．問題と目的

通常、障害児者（以下、同胞）に対して親が世話をする時間が多くなり親の注意が向きやすくなることで、障害児者と暮らす兄弟姉妹（以下、きょうだい）は孤独感を抱いたり、同胞と親の愛情をめぐって張り合うことに対する罪悪感を抱いたりすると言われている（柳澤，2007）。また、自閉症スペクトラム障害児者のきょうだいについて、児童期では同胞が示す特性や能力に対して注目し始めることにより同胞の特性や困難性について否定的に捉える傾向が強いこと、青年期では同胞を通して自分がどのように他者から見られるのかがより一層意識化されることにより、「他者への意識」に関する困惑が増すことなどが指摘されており、抱える悩みや同胞の捉え方はきょうだいの発達段階によって変容することが明らかにされている（柳澤，2009）。 また、重症心身障害児者のきょうだいは、より重症な障害をもつ子どもの母親ほど有意に障害児に手が掛かり、きょうだいのための時間が制約され、我慢させられることが多い（富安・松尾，2001）。同胞の障害について、いつでも気軽に親に質問したり、話題にしたりできることが、きょうだいが同胞の障害を特別視せずに受容していくことに繋がり、一人で悩むことを軽減することが指摘されている（藤井，2006）。

きょうだいへの支援として Shibshop と呼ばれるきょうだいワークショップ・プログラムがある。同じ境遇のきょうだいとのレクリエーションや話し合い活動、専門家を招いたきょうだい向けの講演会を開催することで、きょうだい同士の関係性だけでなく、自分自身や障害児者についての理解を深め、きょうだい達が持つ問題の軽減や解決を図ることを目的としている（Mayer & Vadasy，2008）。このような Shibshop に似た「きょうだいの会」の開催が近年増加しており、きょうだいへの支援やきょうだいの居場所の一つとなっている。

また、きょうだい研究における今後の課題として、きょうだいの日常生活を丁寧に拾い上げ質的に研究していく視点と、障害種別のきょうだいの体験の違いについても、今後より注目することが必要であると指摘されている（大瀧，2011）。

先行研究では、障害種別による違いへの注目が今後の課題とされているが、重症心身障害児者のきょうだいの体験や思いの変容に絞った研究は、いまだ数が少ない。 また、きょうだいの悩みに対する周囲の人の働きかけの影響を検討することで、きょうだいへの適切な支援を考える手掛かりとなると考える。

そこで、本研究では重症心身障害児者を同胞にもつきょうだいに聞き取り調査を行い、幼少期から現在までの体験や思いの変容とそれにおける周囲の人からの影響を検討することを目的とする。また、本研究において、重症心身障害児者の兄弟姉妹を「きょうだい」、きょうだいと生活を共にする重症心身障害児者を「同胞」と表記する。

Ⅱ．方法

1. 調査対象

対象は、重症心身障害児者を同胞にもつきょうだいで基礎疾患がなく、言語的コミュニケーションが可能である者とする。対象者の年齢層は、生活上の体験やその過程、思いが表現できる青年期とする。上記の条件に当てはまるきょうだいである著者の知り合い 4 名に研究協力を依頼し、了解を得た。

表 1　面接対象者のプロフィール

	年齢・性別（属性）	同胞の年齢・性別	他の家族構成	当事者団体所属有無	面接時間
A	22 歳男性（大学生）	20 歳男性	父，母	なし	39 分
B	19 歳女性（大学生）	19 歳女性	父，母	なし	42 分
C	21 歳女性（社会人）	19 歳男性	父，母	母	95 分
D	19 歳女性（専門学生）	21 歳男性	父，母， 妹（中学生）	父	27 分

2. 手続き

20XX 年 11 月から 20XX 年 12 月上旬に、半構造化面接を行った。インタビューは許可を得て IC レコーダーで録音し、逐語録を作成した。インタビューでは、きょうだいの就学前、小学校期、中学・高校期、現在という生育歴に沿って、当時の体験や思い、また将来について考えることなどの聞き取りを行った。作成した逐語録を KJ 法を用いて分析し、カテゴリー【】とサブカテゴリー＜＞を抽出した。なお、対象者には事前に本研究の意義、目的、調査方法、倫理的配慮と個人情報の保護について説明を行い、調査協力の了承を得た。

Ⅲ．結果

【同胞観】や【親ときょうだいの関わり】など 10 カテゴリーと 60 サブカテゴリーが抽出された。また、これらのカテゴリーをさらに収束した結果「きょうだいと同胞に関する過去の体験と思い」、「現在のきょうだいの思い」、「きょうだいの思いと親と祖父母との関係」、「きょうだいの思いと学校・同年代の友人・他人との関係」という 4 つの大カテゴリーが得られた。以下表 2 に示す。

表 2　抽出されたカテゴリー

大カテゴリー	【カテゴリー】	内容
きょうだいと同胞に関する過去の体験と思い	【同胞観】	きょうだいが同胞自身や同胞の行動に対して抱いている思い。
	【同胞との生活に関する思い】	就学前から高校卒業まで、障害のある同胞ときょうだいの直接的関係から生まれる思いや経験などを指す。
	【同胞の施設入所に伴う思い】	同胞が実家ではなく入所施設で暮らすことになったときにきょうだいが感じた思い。
現在のきょうだいの思い	【きょうだい自身の生き方への影響】	同胞がいたことによって、現在のきょうだいがもっている思いや今後の同胞自身の生活への影響。
	【同胞に関する将来の思い】	今後の同胞との生活を考えたときのきょうだいの思い。
きょうだいの思いと親と祖父母との関係	【親ときょうだいの関わり】	きょうだいと親との直接的関係の中で生まれるきょうだいの思いや過去の体験。
	【祖父母ときょうだいの関わり】	きょうだいと祖父母との直接的関係の中で生まれるきょうだいの思いや過去の体験。
きょうだいの思いと学校・同年代の友人・他人との関係	【学校ときょうだいの関わり】	きょうだいの小学校入学から高校卒業までの学校生活の中で感じた思いや経験。
	【同年代の友人ときょうだいの関わり】	きょうだいと同年代の友人との直接的関係の中で生まれるきょうだいの思いや過去の体験。
	【他人ときょうだいの関わり】	地域の人や外出先で出会う人など、他人ときょうだいの直接的関係の中で生まれるきょうだいの過去の体験や思い。

1. きょうだいと同胞に関する過去の体験と思い

1) 【同胞観】

【同胞観】では、7 サブカテゴリーが抽出された。

きょうだいには同胞の発話や身体の状態を見て、自分や他の子と同胞は違うと思う＜同胞の障害の気付き＞があった。＜同胞の障害は普通・当たり前であるという認識＞がある一方で、同胞に障害がなかったら外で一緒に遊べるのにといった＜健常のきょうだいであればという思い＞もあった。また、年下の弟妹を可愛く思うような＜弟妹がいる兄姉として当たり前の感情＞も抱いていた。同胞の行動について、叫ぶような声によって居場所が分かるため同胞は凄いというような＜同胞の行動に関する肯定的な思い＞と、同胞に自分の物を舐められる嫌悪感などの＜同胞の行動に関する否定的な思い＞の両面的な感情を併せもっていた。その後＜同胞の障害の受け入れ＞が進んだという語りが得られた。

2) 【同胞との生活に関する思い】

【同胞との生活に関する思い】では、14 サブカテゴリーが抽出された。

きょうだいは＜同胞への対抗心＞や、同胞の障害による＜外出時の制約への寂しさやもどかしさ＞、テレビのチャンネル争いやご飯のおかずの奪い合いなど周りの友人がしているような＜兄弟喧嘩ができないことへの寂しさ＞を抱えていた。しかし、家で＜同胞と過ごす嬉しさ＞や、同胞の車椅子を押すことで役に立てた気がしたという＜効力感＞を感じていた。＜同胞との楽しいエピソード＞を語るきょうだいもいた。また、障害児者のいない家庭と同じで、同胞がいるからといって特別なことはないという＜同胞との外出時の思い＞や＜小学校期の土日の過ごし方＞、＜中学校期・高校期の土日の過ごし方＞もあった。また、注射を怖がらないなど＜副次的な影響としての病院慣れ＞もあった。部活動が忙しくなったため同胞と過ごす時間が減少したなど＜同胞との関わりの変化＞があった。そして、施設に同胞に会いに行ったときなどに＜同胞と過ごす安心感＞を感じていた。また、きょうだいは試験のない同胞を羨ましく思う反面、同胞は大変なのだから羨ましく思ってはいけないのだという＜同胞への羨ましい感情と罪悪感＞を抱えていた。また、＜同胞に対する保護者のような気持ち・責任感＞を抱いていた。

3) 【同胞の施設入所に伴う思い】

【同胞の施設入所に伴う思い】では、3 サブカテゴリーが抽出された。

きょうだいは、突然同胞と共に暮らせなくなったことで＜同胞の施設入所に対する驚き・寂しさ＞や同胞が一人で施設にいることを考え＜同胞に対する申し訳なさ＞を感じていた。しかし、きょうだいは入所した同胞の体重増加などを知り、施設入所は同胞にとって良いことだったのかもしれないという＜同胞の境遇の受け入れ＞もあった。

2. きょうだいの現在の思い

1) 【きょうだい自身の生き方への影響】

【きょうだい自身の生き方への影響】では、8 サブカテゴリーが抽出された。

同胞をお風呂に入れたり、同胞のオムツを変えたりする体験を＜同胞との生活による得難い体験・強み＞であると捉えられていた。また、将来障害についての本の出版に携わりたいなど＜進路・職業選択に関する同胞の影響＞があった。一方で、幼少期にテレビで見たのがき

っかけでパティシエを目指しているといった、同胞の障害が関係していない＜進路・職業選択の動機＞もあった。また、自分が実家から離れてしまうと同胞の世話が大変になるから離れられないという＜進路選択の制限＞もあった。また、自分が将来結婚するとき、同胞の障害を分かってくれる人や働いて収入を得てくれる人が良いなどの＜結婚相手の条件＞があった。しかし、同胞が影響していない＜結婚観＞をもつきょうだいもいた。また、物をデザインする際に手が麻痺している人も使いやすいというポイントを真っ先に思いついたなど＜きょうだい自身の物事の考え方への影響＞があった。そして、同胞以外の障害者と接する時も周りの人よりうまく関わることができるなど＜障害理解・障害観＞についての語りも得られた。

2) 【同胞に関する将来の思い】

【同胞に関する将来の思い】では、7 サブカテゴリーが抽出された。

きょうだいは、両親が同胞の世話をできなくなった場合は自分が責任を持たならなければならないという＜健常きょうだいとしての責任感＞を感じていた。また、両親が高齢になったり亡くなったりすることに対しては仕方ないと捉えている＜両親亡き後への諦観・悟り＞があった。今後の同胞との生活を考えたときに、障害者年金額の動向などの＜将来の経済的不安＞や、同胞の生活場所や身体の弱さなど＜同胞の今後の体調・生活の心配＞を感じていた。お金を貯めて同胞の部屋を実感に作りたい、もし自分が同胞の世話をできなかったら施設に入れることを親と話しているといった＜同胞の将来の展望＞を持っているきょうだいもいる一方、将来のことは考えたことがないという＜将来の展望なし＞のきょうだいもいた。また、社会人になるにあたって＜自立・転勤によって同胞に会えないことの寂しさ＞を感じるきょうだいもいた。

3. きょうだいと親・祖父母に関する過去の体験と思い

1) 【親ときょうだいの関わり】

【親ときょうだいの関わり】では、6 サブカテゴリーが抽出された

同胞の世話をする親に対し＜親の多忙による関わりの少なさ・孤独感＞を感じていたというきょうだいが大半だったが、＜孤独感のなさ＞を語るきょうだいもいた。きょうだいは親からの言葉により、自分は頑張らなければならないと感じ＜親の思いの漠然とした自覚＞をしていた。また＜親との良好な関係・家族の団欒＞があり、家族ときょうだいが話す機会が多くあった。また、母親の家事等の大変さを感じるとともにもっと自分が手助けできることがあったのではないかという＜母親への謝意・自省＞を感じていた。また、親が煩わしく感じたり喧嘩をしたりするなど＜思春期特有の親への思い＞もあった。

2)【祖父母ときょうだいの関わり】

【祖父母ときょうだいの関わり】では、5 サブカテゴリーが抽出された。

きょうだいは＜孤独感を埋める祖父母の存在＞や＜同胞を特別扱いしない祖父母の接し方＞を嬉しく思っていた。一方、＜同居することとなった祖父母との不仲＞があり、お互い気を遣うことでストレスを感じていた。また、「弟を施設にやるのはしょうがないよね」という＜祖父母からの何気ない一言に対するやるせなさ・怒り＞を感じることもあった。また、同胞の発作の回数を覚えるなど、普段から行っていることを祖父母に＜褒められることに対する違和感＞を感じていた。

4. きょうだいと学校・同年代の友人・他人に関する過去の体験と思い

1) 【学校ときょうだいの関わり】

【学校ときょうだいの関わり】では、2 サブカテゴリーが抽出された。

小学校から高校まで、きょうだいは＜教師の気遣い・話し相手としての存在＞により、不安や孤独感を軽減させていた。同胞が関係しない＜きょうだい自身の学生時代のエピソード＞も得られた。

2) 【同年代の友人ときょうだいの関わり】

【同年代の友人ときょうだいの関わり】では、5 サブカテゴリーが抽出された。

きょうだいは良好な友人関係を築けており＜友達と同胞の関わり方や気遣い＞を嬉しく思っていた。一方で、小学校期に学校で同胞のことを話すのが憚られるなど＜友人に対する同胞の気まずさ＞や障害児のいる家庭といない家庭の経験の差から＜友人と自分の感覚のズレ＞を感じていた。その後、周りと自分が違うことも別にいいのではないかという＜感覚のズレの受容＞をしていた。また、障害のことに関しての＜親しい友人からの何気ない一言に対するやるせなさ・怒り＞を感じた経験もあった。

3) 【他人ときょうだいの関わり】

【他人ときょうだいの関わり】では、3 サブカテゴリーが抽出された。

きょうだいは同胞に対しての＜地域の人からの気遣いや理解＞を嬉しく思っていた。一方で、同胞との外出時に周囲の人の視線を感じ＜他人の目に対する嫌悪感・諦め＞を抱いていた。また、きょうだいは障害のある家族がいるから将来特別支援教育関係の仕事に就くのではないかという＜“きょうだい”として見る周囲からの目＞を感じ、やるせなさを感じた経験があった。

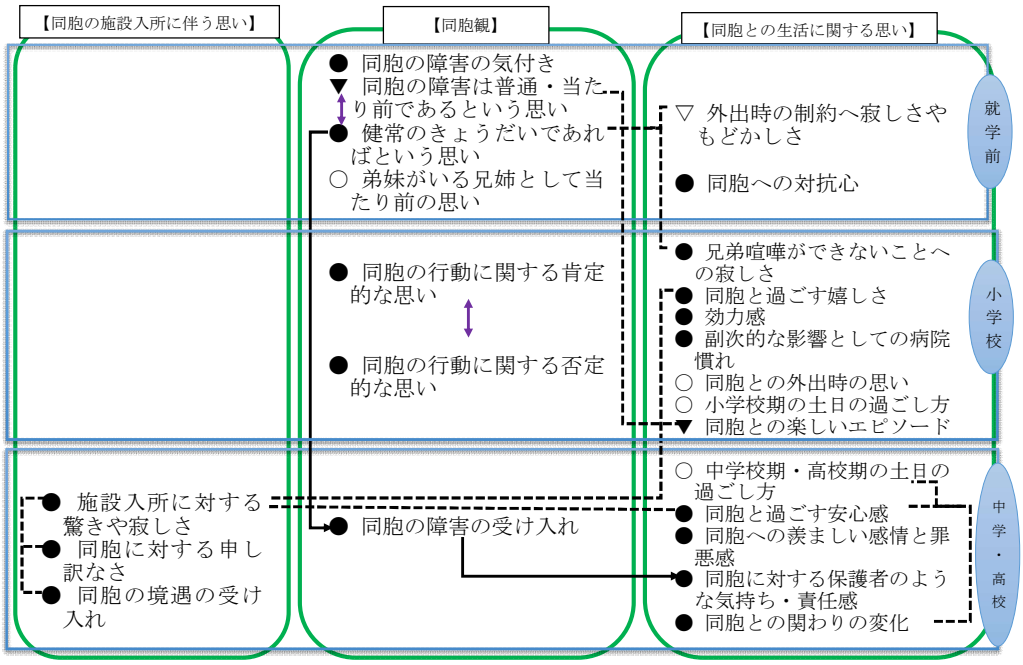
Ⅳ．考察

1. きょうだいと同胞に関する過去の経験と思いにおける各カテゴリー間の関係

きょうだいの過去の体験や思いにおけるカテゴリー間の関係を考察し、図 1 に示した。

就学前・小学校期のきょうだいの同胞に対する思いには、肯定と否定の相反する感情が読み取れる。その後中学・高校期に＜同胞の障害の受け入れ＞が進み、現在同胞を障害児だと特別視せず当たり前の兄弟姉妹として良好な関係が築けていると考えられる。

中学・高校期には、同胞の施設入所やきょうだい自身の部活動、友だちとの余暇の充実などの＜きょうだいの中高の過ごし方の変化による同胞との関わりの変化＞があり、同胞と一緒に過ごす時間の減少がみられる。同胞の施設入所に関して、きょうだいはその事情やメリットは理解しつつも、やはり同胞と一緒にいたいという気持ちを抱えていると推察される。障害受容と相まって＜同胞に対する保護者のような気持ち・責任感＞に繋がっていたのではないだろうか。



実線矢印：思いの変容に関する思いや体験　点線矢印：カテゴリー間の関連
●：同胞・障害が関わる思いや体験　○：同胞が関連がする思いや体験
▼：現在まで継続する思いや体験　▽：次のライフステージまで継続する思いや体験

図 1　きょうだいと同胞に関する過去の体験と思いにおける各カテゴリー間の関係

2. 現在のきょうだいの思いにおける各カテゴリー間の関係

現在のきょうだいの思いにおけるカテゴリー間の関係を考察し、図 2 に示した。

きょうだいは＜同胞の障害の受け入れ＞をすることで、今までの経験を＜同胞との生活による得難い体験・強み＞だと捉えることができていた。同胞がいることが進路・職業選択の動機付けやきょうだい自身の物事の考え方、障害理解・障害観に影響していることが推察される。また、必ずしもきょうだいの将来の生き方に直接的に影響を与えるわけではないが、

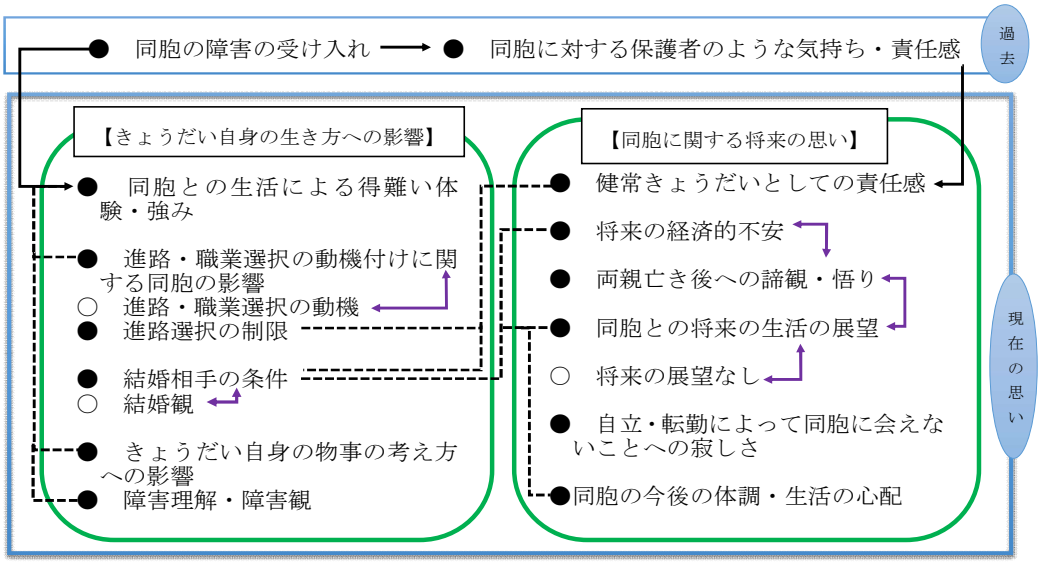


図 2　現在のきょうだいの思いにおける各カテゴリー間の関係

＜健常きょうだいとしての責任感＞はきょうだいの進路選択や結婚に影響を及ぼしていると考えられる。特に、きょうだいの＜結婚相手の条件＞には、＜将来の経済的不安＞や＜同胞との将来の生活の展望＞、＜同胞の今後の体調・生活の心配＞が関係しており、きょうだいは同胞との将来の生活や付き合い方を考え、将来のパートナーを選ぼうとしていた。

3. きょうだいの思いと親・祖父母との関係における各カテゴリー間の関係

きょうだいの体験や思いと親・祖父母との関わりにおけるカテゴリー間の関係を考察し、図 3 に示した。

きょうだいの孤独感はもっと親に構ってほしいという思いとなり、同胞に負けたくないという＜同胞への対抗心＞となって現れていたと考えられる。その孤独感を埋める関わりとして、祖父母の存在があった。その一方で、＜祖父母からの何気ない一言に対するやるせなさ・怒り＞を感じることもあり、祖父母と中学・高校期のきょうだいの間で同胞に関する思いのズレが生じることもあったと推察される。しかし、＜親との良好な関係や家族の団欒＞や＜同胞を特別扱いしない祖父母の接し方＞のように、家族全体として良い関係づくりができており、同胞を受け入れていたことが、きょうだいの同胞の障害受容に影響したと考えられる。また＜母親への謝意・自省＞と＜親の思いの漠然とした自覚＞は、健常きょうだいとしての自分の家族内での役割や今後の同胞との生活を考えるきっかけとなり、現在の＜健常きょうだいとしての責任感＞へ繋がると推察される。

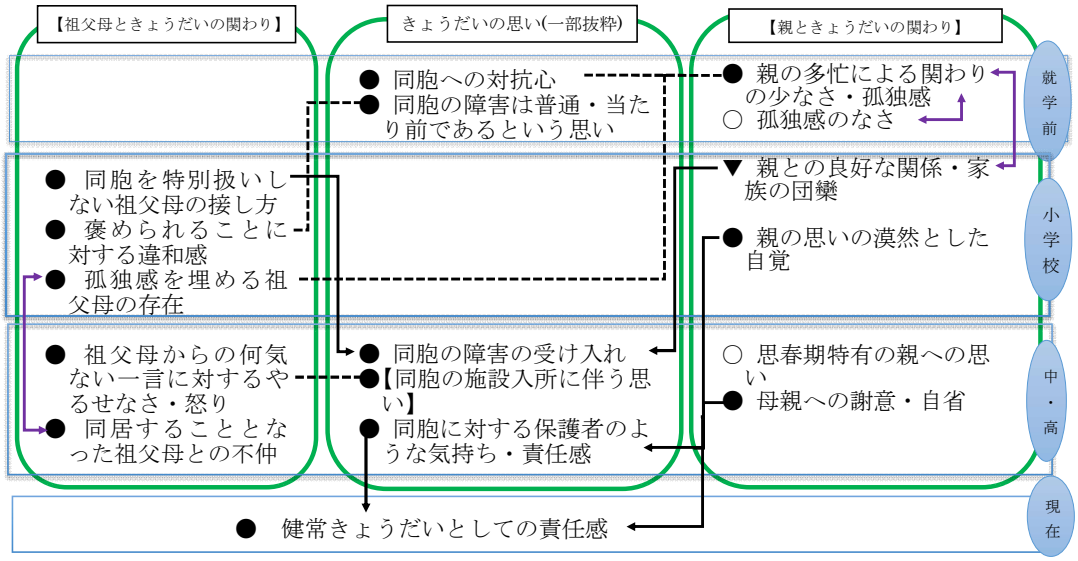


図 3　きょうだいの思いと親・祖父母における各カテゴリー間の関係

4. きょうだいの思いと学校・同年代の友人・他人における各カテゴリー間の関係

きょうだいの体験や思いと学校・同年代の友人・他人との関わりにおけるカテゴリー間の関係を考察し、図 4 に示した。

学齢期のきょうだいには＜教師の気遣い・話し相手としての存在＞があり、きょうだいが様々なことを教師と話したり、自分の悩みを打ち明けたりできる環境があった。また「良い友人ばかりだった」や「友人が同胞のことを気に掛けてくれて嬉しかった」という語りがあり、きょうだいは友人に対する同胞の気まずさは感じつつも、友人の同胞を特別扱いしない関わり方や気遣いを感じ、良好な友人関係の中で同胞に関する不安を打ち明けることができ

る環境にあったと推察される。地域でも＜地域の人からの気遣い＞があり、これらの環境がきょうだいの同胞の障害の受け入れに影響していたと推察される。

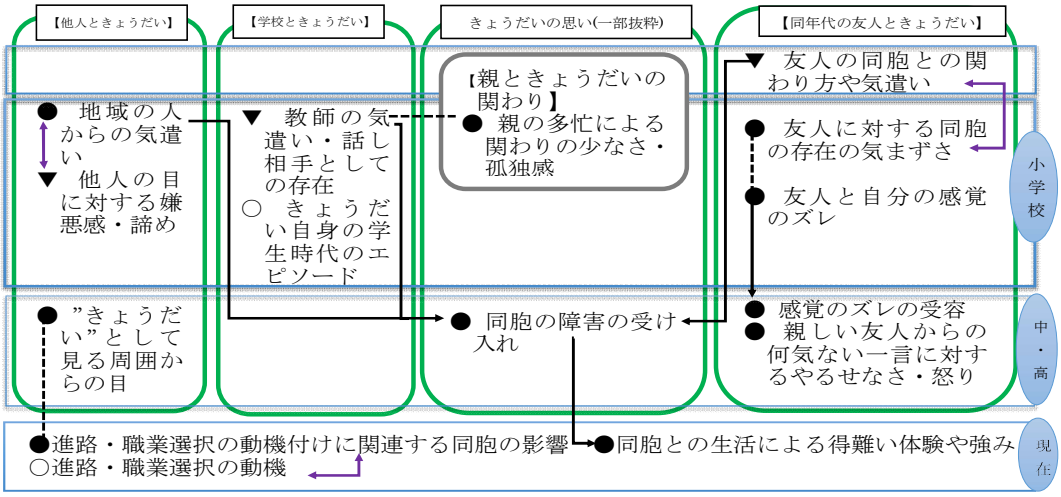


図 4　きょうだいの思いと学校・同年代の友人・他人における各カテゴリー間の関係

V．まとめと今後の課題

きょうだいが同胞の障害受容をするまでの過程において、周囲の働きかけとして、親との良好な関係づくりや家族の団欒、話し相手としての存在や、周囲の気遣い、同胞を特別扱いしない関わり方が有効であったと考えられる。藤井（2006）の研究のように周囲の人が同胞の存在を受け入れており、きょうだいが自分の感情を表出できる環境がプラスに働いたと考えられる。

一方で、祖父母や友人など周囲の人と自分との間に同胞に対する思いや感覚のズレがあり、密かにやるせなさや怒りを感じたという経験がある。きょうだい特有のこのような経験や思いは、同じ又は似た経験や思いをもつきょうだい間でこそ打ち明けやすいと推測される。きょうだいが本音を打ち明けられる場として、きょうだい会の情報提供やきょうだい会設立に向けた援助が必要ではないだろうか。

また、中学・高校期におけるきょうだいが同胞と過ごす時間の減少は、親が同胞の世話をきょうだいに強いることなく、同胞と距離をもつことを認めていたと捉えることができる。矢矧ら（2005）が障害受容の要因の一つに、きょうだいと家族、同胞の適度な距離を挙げているように、きょうだい自身の生活を充実させ、“きょうだい”であることから離れる時間も重要だと考える。

本研究では健常きょうだいとしての責任感から進路選択に制限を感じていたというケースがあった。橘ら（1999）はきょうだいが職業選択・決定などの人生の岐路において、自分の思いと同胞の存在との間で葛藤状態にあることを述べている。青年期には、同胞と自分の将来の生活や結婚についてなど、自分の人生について悩む時期であるといえる。そのような時期に悩みや不安を打ち明けられる場所は必要であり、特に同じ思いを抱える人と出会えたり、共感し合えたりするようなきょうだい会の開催は有効であると考える。

本研究の研究協力者は比較的スムーズに同胞の障害受容ができていたようが、今後、家族関係に葛藤やわだかまりを抱えているきょうだいについての研究も必要である。

付記

本研究を行うにあたり、貴重なお時間を割いてインタビューにご協力してくださったきょうだいの皆様に心より感謝申し上げます。

文献

1) 藤井和枝(2006) 障害児者のきょうだいに対する支援（1）. 人間環境学会紀要, 6, 17-32.
2) Meyer D.J. & Vadasy P.F.(2008) Sibshop: Workshops for siblings of children with special needs Revised Edition. Paul H. Brookes, Baltimore, Maryland.
3) 新家一輝(2010) 小児の入院と母親の付き添いがきょうだいに及ぼす影響. 日本看護科学会誌, 30(4), 17-26.
4) 大瀧玲子(2011) 発達障害児・者のきょうだいに関する研究の概観：きょうだいが担う役割の取得に注目して. 東京大学大学院教育学研究科紀要, 51, 235-243.
5) 富安俊子・松尾壽子(2001) 障害児とそのきょうだいを育てている母親の体験調査. 母性衛生, 42(1), 87-92.
6) 矢矧陽子・中田洋二郎・水野薫(2005) 障害児・者のきょうだいに関する一考察：障害児・ 者の家族の実態ときょうだいの意識の変容に焦点をあてて. 福島大学教育実践研究紀要, 48, 9-16.
7) 家森百合子・大島圭介(2010) 重症児のきょうだい：ねぇ聞いて…私たちの声. 株式会社クリエイツかもがわ, 重症心身障害児（者）を守る会近畿ブロック.
8) 柳澤亜希子(2007) 障害児・者のきょうだいが抱える諸問題と支援のあり方, 特殊教育学研究. 45(1), 13-23.
9) 柳澤亜希子(2009) きょうだいの自閉症児・者に対する理解をめざした教育的支援. 風間書房, 財団法人国際障害者年記念ナイスハート基金.

Journal of Inclusive Education
Asian Society of HUMAN SERVICES

- Editorial Board -

Editor-in-Chief	Atsushi TANAKA	University of the Ryukyus (Japan)
Executive Editor	Changwan HAN	University of the Ryukyus (Japan)

Aiko KOHARA
University of the Ryukyus (Japan)

Aoko CHINA
National Institute of Vocational Rehabilitation (Japan)

Eonji KIM
Hanshin PlusCare Counselling Center (Korea)

Haejin KWON
Ritsumeikan University (Japan)

Hideyuki OKUZUMI
Tokyo Gakugei University (Japan)

Iwao KOBAYASHI
Tokyo Gakugei University (Japan)

Kazuhito NOGUCHI
Tohoku University (Japan)

Keita SUZUKI
Kochi University (Japan)

Kenji WATANABE
Kio University (Japan)

Kohei MORI
Kanda-Higashi Clinic, MPS Center (Japan)

Liting CHEN
Sophia School of Social Welfare (Japan)

Mika KATAOKA
Kagoshima University (Japan)

Mikio HIRANO
Tohoku Bunka Gakuen University (Japan)

Nagako KASHIKI
Ehime University (Japan)

Shogo HIRATA
Ibaraki Christian University (Japan)

Takahito MASUDA
Hirosaki University (Japan)

Takashi NAKAMURA
University of Teacher Education Fukuoka (Japan)

Takeshi YASHIMA
Joetsu University of Education (Japan)

Tomio HOSOBUCHI
Saitama University (Japan)

Toru HOSOKAWA
Tohoku University (Japan)

Toshihiko KIKUCHI
Mie University (Japan)

Yoshifumi IKEDA
Joetsu University of Education (Japan)

Editorial Staff

- Editorial Assistants	Mamiko OTA	University of the Ryukyus (Japan)
	Sakurako YONEMIZU	Asian Society of Human Services

Journal of Inclusive Education
VOL.3 August 2017
© 2017 Asian Society of Human Services
Editor-in-Chief Atsushi TANAKA

Presidents Masahiro KOHZUKI・Sunwoo LEE

Publisher Asian Society of Human Services
Faculty of Education, University of the Ryukyus, 1 Senbaru, Nishihara, Nakagami, Okinawa, Japan
FAX: +81-098-895-8420 E-mail: ashs201091@gmail.com

Production Asian Society of Human Services Press
Faculty of Education, University of the Ryukyus, 1 Senbaru, Nishihara, Nakagami, Okinawa, Japan
FAX: +81-098-895-8420 E-mail: ashs201091@gmail.com

Journal of Inclusive Education
VOL.3 August 2017

CONTENTS

ORIGINAL ARTICLES

Analysis of Teaching Method for IN-Child Showing Behavior Similar to ADHD.....**Mamiko OTA**, et al. 1

Factors Affect Assessment of Educational Outcome about
Social Function for Children with Intellectual Disabilities.....**Natsuki YANO**, et al. 18

Research on Recognition of Teacher's Expertise in Hearing Impairment Education:
Focus on Expertise such as Curriculum, Teaching Method and Characteristics and Psychology.....**Kohei MORI**, et al. 25

REVIEW ARTICLE

Literature Research about the Support of Self-understanding and Career Decision-making
for High-school and University Students with Developmental Disorders..... **Hirotaka KUWAKI**, et al. 38

SHORT PAPERS

The Verification of Reliability and Validity of Special Needs Education Assessment Tool (SNEAT) for Standardization:
Based on the Data from Tochigi Prefecture.....**Haena KIM**, et al. 50

Reasonable Accommodations Required by Physically Handicapped Children Enrolled in Regular Classes:
A Study on Discomfort and Inconvenient Circumstances and Their Corresponding Accommodations
..... **Osamu ISHIDA**. 57

Survey on Information Disclosure Status of Disability Student Support Policy at National Universities:
Mainly on Information on the Homepage..... **Takeshi ODAGIRI**, et al. 65

ACTIVITY REPORTS

The Transformation of Thoughts and Feelings of the Siblings of Severely Handicapped Children and the Surrounding People:
Interviews with Siblings during Adolescence..... **Ayaho OCHI**, et al. 77

The Practical Study of the Systematical Life Unit Leaning from 1st to 12th Grade of Special Support School:
Class Planning by Utilizing Career Development Support..... **Nagako KASHIKI**, et al. 87

Published by
Asian Society of Human Services
Okinawa, Japan